

早稲田大学大学院文学研究科
博士学位申請論文審査報告要旨

申請者氏名	諸星 和夫
学位の種類	博士(文学)
論文題目	シメオン・ポーロツキイと『韻文詩篇』(1680) — 作品の成立に関わる文献学的ならびに文芸社会学的考察

審査要旨

本博士学位申請論文は、17世紀のモスクワで宮廷詩人、劇作家、説教者、宗教政治家、教育者として活躍したシメオン・ポーロツキイ（サムイル・エメリヤーノヴィチ・ペトロフスキイ - トニャーノヴィチ）の代表作の一つである『韻文詩篇』の成立基盤を、彼が人間形成を行った西方ロシア（ベラルーシ、ウクライナ）の精神風土の歴史的分析を通じて解明しようとするものである。

『詩篇』テキストは、中世西欧の共通語であったラテン語、東方正教会の共通語であった教会スラヴ語、また近世に成立した民族諸言語（ドイツ語、英語、ポーランド語など）において、階級の上下を問わず最も愛された聖書テキストであったが、これをスラヴ民族の共通語である教会スラヴ語において韻律を調えたうえで創作された、歌唱、朗読にふさわしいシメオンによる韻文テキストは、宗教的混乱に陥った17世紀の中欧、東欧、ロシアに諸宗派の統合をもたらすためのもっとも有効なツールとなること目指された。詩篇テキストを、生活に溶け込んだ「個人的な経験」から、百科全書的な整序を経た「普遍的な知識」と「集団的歌唱」に置き換えたことも、ラテン語の知識、運用能力に秀でた東スラヴ知識人シメオンによる、時代の要請に応じた大きな文化的業績であったと言えるだろう。

申請者は、シメオンにこの作品の着想を与えた動因を、西方ロシアの独特な精神風土に求め、その複雑な歴史的背景を、「フィレンツェ公会議理念」、「サルマチア理念」という西欧、東中欧、ロシアの歴史を背景にもちつつも申請者によって着想された二つの独創的な分析装置によって明らかにしている。申請者によれば、西方ロシアは、ハプスブルグ、ジェチポスポリータ（ポーランド＝リトアニア）、ロシアに囲まれ、それらのすべての影響に晒されながら、それらのどれにも属することなく、在地の正教会、正教兄弟団、キエフ・アカデミー、在地のカトリック教会、教皇庁、イエズス会、合同教会、ルター派、カルヴァン派、ソツィーニ派などさまざまな宗派が入り乱れて覇を競い、たがいにその消長を繰り返した地域であり、この深刻な諸宗派の対立ゆえに、諸宗派を一つにまとめ、宗派對立を克服させる「統一理念」が切実に求められていた。また西方ロシアにはさらにその西方に、ヤン・コハノフスキという偉大なルネサンス詩人を輩出したポーランドというスラヴ語文芸の先進地域があったが、西方ロシアはポーランド・ルネサンス文芸の強い影響のもとに、しかしながら西欧とは異なる独自の歴史をもつ正教文化を守りながら、ピョートル・モヒラをその代表者とする正教文芸の復興運動をも経験していた。西方ロシアはつまり、カトリック、プロテスタント、正教にまたがる熾烈な諸宗派對立の克服の経験を持つ地域でもあった。

ピョートル・モヒラの創設したキエフ・アカデミーに学んだシメオン・ポーロツキイは、西方ロシアの諸宗派の対立を克服させる正教文芸復興の潮流を自ら消化しながら、正教原理主義からわずかにキリスト教諸宗派統合の道を歩きはじめたアレクセイ・ミハイロヴィチ帝統治下のモスクワに招かれ、ロシアを西欧キリスト教諸国と同列の、「世界に通じる」キリスト教国家にすることに尽力した。やがてピョートル大帝の西欧化改革によって飛躍的な成長を遂げるロシアの西欧化事業の先鞭をつけたという意味合いにおいて、西方ロシアを揺籃にもつ東スラヴ文化人シメオン・ポーロツキイは、ロシア史において特異で巨大な意味をもっていると申請者は考えている。

公開審査会では、以下の論点について活発に議論が行われた。

ある審査員は、「西方ロシア」という用語を採用した学術的な根拠を質した。これに対して、申請者は、「西方ロシア」という語は Ruthenia の訳語であり、モスコヴィアとも言われたロシアとの対比に

において、ポーランド＝リトアニア連合国家の影響圏にあったキエフ・ルーシの地方、ベラルーシ、ウクライナを指すとあらためて明確に定義し、日本のスラヴ研究において伝統的に用いられてきた用語であること、「西ロシア」という語はロシア西部を指す含みを持ちうるので曖昧で不適格であることを十分な説得力をもって説明した。また、同じ審査員は、シメオンの『韻文詩篇』が「読まれるためのもの」であったか、「歌われるためのもの」であったのかという問題を提起し、キエフ・コレギウムで音楽の教育を受けたはずのシメオンが自ら『韻文詩篇』の作曲を手掛けた形跡は認められるか否かを問うた。これに対して、申請者は 1680 年にシメオンが没したあと 1682 年にチトフによって『韻文詩篇』に旋律をつけられた事実を指摘しつつも、シメオンがキエフ・コレギウムにおいて音楽教育を受けたことは確かであるが、シメオンが音楽活動に従事した事実は実証的に認めることはできず、『韻文詩篇』も西方ロシアで歌われていた詩篇に心打たれたことから着想されたのは事実だとしても、シメオン自身は「読まれるためのもの」として創作していたと自らの考えを明確に述べた。別の審査員は、東西の宗派对立を乗り越え、アレクセイ・ミハイロヴィチ帝のもとで東西キリスト教世界の統合を企図したシメオンの思想と活動を、西方ロシアの精神風土を踏まえ、『韻文詩篇』という具体的な作品を通じて克明に位置づけた、思想史、文化史の画期となる完成された論文と高く評価したあとで、①「フィレンツェ公会議理念」、②「サルマチア理念」、③複合国家・複合君主政論・普遍帝国論の観点、④中・東欧における親露主義の多様性と共通性の観点、⑤近世歴史学の観点からの用語の問題、以上 5 点からの提言を行った。審査員はおもに、フィレンツェ公会議は、リトアニアの異教徒やフス派の異端をポーランドが擁護したコンスタンツ公会議との関連で理解したほうが、シメオンの創作活動を理解するうえでより有益であること、また「サルマチア理念」はロシア的な専制君主（アウトクラトル／サモジェルジュツ）概念よりも、公会議主義や公会議主義から正統性を担保される選挙王政との親和性があることなどを指摘した。これに対して、申請者は、シメオンに代表される西方ロシアの精神性は西のキリスト教の影響を受けながらも、本質的に東方正教のそれであり、シメオンも最終的に西を峻拒するモスクワを指向することになったという回答を行った。

総合的に判断して申請者は、ポーランドの音節詩をはじめてロシアに導入したという文学史的意義を超えて、さまざまな伝統を消化して自前のものに作り替え、諸宗派の統合を志したシメオン・ポーロツキイという文化事業者の実態に迫っており、申請者自身が主張するとおり、本博士学位申請論文は文芸学的な韻律論、模倣論をはるかに超え、偉大なる文化事業者であったシメオン・ポーロツキイの万教帰一的な文明論的意義を解明するものとなっている。これを可能にしたのは、ラテン語、ポーランド語、教会スラヴ語など、諸言語に通じた申請者の言語的素養と学識である。中世ロシアの文筆家を掘り起こすこのような仕事は、日本では皆無であり、またロシア、中東欧、欧米でもかなり珍しく、その意味で極めて画期的なものと評価される。以上の理由に拠り、審査員は全員一致で本博士学位申請論文を博士学位の授与にふさわしいものと判断した。

審査会開催日	2024 年 1月 13日
--------	---------------

審査委員資格	所属機関名称・資格	氏名	専門分野	博士学位
主任審査委員	早稲田大学・教授	三浦 清美	中世ロシア文学	博士(東京大学)
審査委員	早稲田大学・名誉教授	伊東 一郎	ロシア民俗学、フォークロア研究	修士
審査委員	早稲田大学・教授	中澤 達哉	近世・近代中東欧史	博士(早稲田大学)
審査委員				
審査委員				